

松崎賢士郎

筑波大学大学院 人間総合科学研究群 体育科学学位プログラム 博士後期課程 1年

筑波大学大学院

人間総合科学研究群 体育科学学位プログラム 修士課程卒

競技者として剣道に向き合い、ただひたすらに日本一を目指して精進してきた大学 4 年間と比べて、2 年間の大学院生活では、競技者としてはもちろん、研究者、そして指導者として新たな一歩を踏み出すと同時に、それぞれの領域において幾多の貴重な経験を得た。

まず、研究面では、修士論文や博士後期進学にあたり、実験・分析に追われる毎日であった。剣道の戦略的反応の実態を明らかにするために、よりリアルで実質的な実験設定に苦労しながらも、様々な競技レベルの実験データを取得することができた。修士論文は、その一部のデータを分析し執筆したが、今後は取得した実験データを多角的に分析し、博士号の取得に努めていきたい。

次に指導面では、中高一貫校の剣道部コーチとして、週 2 回程度の部活動指導に携わった。「感覚の言語化」の難しさを痛感するとともに、彼らの剣道のどの部分を個性とみなし、どの部分が癖となってしまうのかを判別し介入する難しさに苦悩した。自分の助言によって彼らの個性が失われないよう、初めの頃はなかなかアドバイスができずにいたが、試合をみたり実際に剣を交えたりする中で、徐々にその境目を理解できるようになってきたと感じている。2 年間の指導を通して、競技力と指導力は必ずしも比例しないことを体験的に感じ取ることができ、指導者としても一流になるための大切な一歩を踏み出せたと感じている。

最後に競技面について振り返ると、全日本連覇がかかった 2021 年での予選敗退をはじめ、非常に悔しく、苦しい日々が続いた 2 年間であった。それでも、高い競技成績を残してきた剣道家の多くが警察特練員である中、大学院進学を決断した私は、この立場で結果を残すことに強い使命と責任を抱いている。その挑戦はまだ始まったばかりである。もう一度全日本を獲り、世界 No.1 の選手になれるよう、既存の枠組みにとらわれない思考をもって競技力の向上に励んでいきたい。

この 2 年間において、正直大した功績は残せなかったが、自分自身の将来的なキャリア形成をより明確にできた大学院生活であったと感じる。最終的には、競技者・研究者・指導者のすべての立場で納得のいく結果を残すことができるよう、限りある時間を最大限有効に使って、悔いのない剣道生活を送っていきたい。